
パルミラ

Yoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パルミラ

【Nコード】

N4511H

【作者名】

Yoi

【あらすじ】

少し先の、未来の話。僕らはいつも、ひとりの少女を連れて歩いている。手を引けばついて歩き、語りかければ微笑むだけの機能を持った幼い少女。それは、幸せの新しいかたち。僕らはもう、独りでは、ないのだから……。『パルミラ』と呼ばれる少女型アンドロイドが普及しつつある近未来。人々は“絆”を避け、パルミラとの関係に安らぎを見出すが……。

独り、少女を連れて

ある、今からそう遠くはない、未来の話。

十
一

僕らはいつも、一人の少女を連れて歩いている。

白い服を着た、東洋人とも、西洋人ともつかない、愛らしい顔立ちの、4、5才くらいの、女の子。女の子は、パルミラ、と呼ばれていて、誰の連れているパルミラも、みんな同じ顔をしている。

でも、一緒に暮らしているうちに、みんなそれなりに、愛着がわくらしく、うちの子はちよつと背が小さいとか、鼻立ちがいいとか、そんな些細な違いを気にとめては、悩んだり、自慢したりしている。パルミラは、そんなとき、何も言わずに、ただ子供らしい、美しい笑みを浮かべて、にこにこことほほ笑んでいる。

パルミラを僕らが連れて歩くようになったのは、いつからだったろう。

携帯電話が普及し、パソコンが普及した時も、そうだったような気がするが、すべて、まるで、あらかじめ用意された水路に、水が流れていく時のように、速やかに、静かに普及していった。気がついた時には、パルミラの販売が開始しされてから、ものの2年ほどの間に、普及率は3割を超えていた。そこから、みんな持っていて当然となるまでに、さらに5年ほどだっただろうか。ともかくも、販売開始から10年しないうちに、パルミラは人々の必需品の一つとなったわけだ。

パルミラ、というのは、そもそも、この製品の商品名に由来してい

る。この少女を作った会社は、そもそも、何とかテクノロジという、アメリカのベンチャー企業だったそうだが、この商品の爆発的な人気を受けて、ついに会社名をも、パルミラ社に変更した。

パルミラの不思議なところは、他の模造品企業が似たようなものを作っていたのだが、全く普及しなかったところにある。パルミラ社自身も、はじめのうちは、パルミラに、もっとおしゃべりする機能とか、簡単なお仕事をお手伝いできる機能を付けた商品を販売したが、すべて、初代のパルミラほど普及はしなかった。同様に、模造品企業の作ったパルミラ様の品物も、元のパルミラほどの人気を得ることはついぞなく、そうした会社はやがてすっかり諦めて、パルミラ関連の仕事からは、早々に手を引いてしまっていた。

パルミラ社も、もはや、パルミラの性能をさらに上げようなどという野心は捨てて、ただ、現行モデルの品質向上などのマイナーチェンジや、修理の対応などに専念しているそうだ。

パルミラは、登場直後から、あまりに完成されすぎていた。だからこそ、人々は、それ以上の変化をむしろ嫌うのだった。パルミラは、パルミラとして、何も言わず、ただ傍らにいて、時々話しかければ、こちらを見て、にっこりと笑ってくれればいい。ただそれだけの需要を満たすためだけの、品物だった。

人によっては、パルミラに愛着がわくあまり、名前を自分でつけている人もいるらしい。しかし、多くの人は、パルミラを、ただパルミラ、と呼んでいる。

パルミラの衣服の背中ボタンを少しだけ開けさせてもらうと、肩甲骨の間あたりに、”Palмира”という名前と、それぞれのシリアルナンバーの刻印が見える。しかし、パルミラが人間の少女

らしくないのは唯一その点だけで、後は、完全に、人間の少女そのものなのだった。

手をつなげば、その皮膚の触感や、肌のかすかな暖かさに、驚かない人はいないだろう。

多くの人は、はじめ、販売代理店でデモンストレーション用のパルミラと手をつないでみて、目を丸くする。そして、思わず、その瞳にやさしく笑いかけるように体をかがめて、その愛おしい手を、両手で包みこまずにはいられなくなる。その時から、その人とパルミラとの関係が始まるのだ。パルミラは、そうした、購買者に決定的な変化をもたらすような事態においても、ただ美しく、愛らしい笑みを浮かべて、彼や彼女の微笑みに答えているだけだ。

フェーズ・トランジション

パルミラは今や、会社のオフィスや、仕事場などへも持ち込みが許されている。

鉄道会社などは始め、列車一両あたりの人間の積載率が減ってしまったので、大いに文句を言っていた。

しかし、やがて、ある一社がパルミラ付帯料金を導入したところ、3割増しの切符であるにもかかわらず、売れ行きは好調だった。今では、どの鉄道会社でも、パルミラ付帯切符を導入していて、航空会社も膝の上に乗せるか座席の前に立たせることを条件に、パルミラの機内への持ち込みを許可している。

飛行機の座席の上に、同じ顔をした少女が、ずらりと並んで座っている様は、壮観なものだ。この場合もパルミラ付帯料金はやや割高になるが、それでも人々は、彼女らを手荷物預かり所に放り込むようなことはさせない。

きつちりとお金を払ってでも、パルミラを座席にまで連れて行くのが、今や常識的な行動と受け止められている。

実際に、以前、あるお金のない学生がやむにやまれず、パルミラを手荷物に預けようとしたことがあった。それを許した航空会社の窓口の気も知れないが、ともかくも向こうも仕事であるので、顧客の要求どおりに、その“手荷物”に荷札を付けて、ベルトコンベアーに流してしまった。ところが、その荷札をつけられてベルトコンベアーの上を流れていく少女の姿を見るに見かねた初老の男性が、突如、窓口の女性に怒鳴りかかって、黒いベルトの上を流れて行く気の毒なパルミラを止めさせた。そして、全く面識のないその所有者の学生の分までお金を払って、その哀れなパルミラを座席に座らせ

てあげたのだという。

この話は、パルミラが人々の間に受け入れられていることを明確に表す事例として、当時、新聞のコラムなどで何度か取り上げられ、助けた男性のインタビューを報じた局すら、一つや二つではなかったと記憶している。

パルミラが僕らの社会においてかけがえのない存在であることを示す例は、まだ他にもある。

これは、パルミラの最大の特徴であり、また、当然の性質でもあるのだが、彼女たちは、たとえ何年連れ添っても、年をとることが無いのだ。

ある作家は、新聞に寄せた論評でそれを永遠の少女と形容し、「若い者にとつては、最初の恋人であり、あるいは友人であり、年齢を重ねるに従って、それらは愛しむだけの存在から、守らずにはいられなくなる存在へと変化する」と述べた。

そのような複雑な変化を、年齢とともにしていく関係が他にあるだろうか。

幼馴染は自分とともに年をとり、それによってお互いの関係もまた不気味な煩わしさを伴って不可逆的に変化していくものだが、パルミラとの関係は何かの上に何かが積み重なるように、変化していくと言ったら、パルミラを知らない人にも解ってもらえるだろうか。

その作家の言ったように、初めは、ただ一緒にいてくれるだけの存在なのだが、やがてそれが、いてくれるというだけでなく、自分に

とつて無くてはならない存在となり、そして、その上に、守るべき存在であるという認識が重ねられていくのだ。

それは単純に、自分ひとりの成長に伴う変化にすぎないのだが、いつまでも顔の変わらないその少女は、幼いころの恋人に感じる懐かしくほろ苦い感情の上に、命の不思議を見るような感動があり、さらに、それを抱きしめずにはいられない親や祖父母の感性が折り重なった、不思議な性質を持っている。それは身内のようで、とても遠く、どこか気恥しく、そして、とても優しい感覚だ。

人々が、パルミラといつまでも手をつなぎ続けているのは、おそらくその感覚を途切れずに、感じていたいからだろう。幼い日の彼女は、あるいは自分の子供は、成長とともに変化し、いずれは記憶の中だけのものになってしまう。しかし、パルミラはいつも、そこにいる。手をつなくものが、その折々に感じた感情を、どんどん上塗りしながら、パルミラは他の何よりもかけがえのないものへと変化していくのだ。

これは、僕らが科学の進歩によって得た、全く新しい関係であり、感覚であるのだろう。

このように、もはや社会の大方の人々から親愛の情を持って受け入れられているパルミラだが、それでも、これを社会からのぞいてしまふべきだと主張する人々もいるにはいる。それらの人々が主張するには、人間の愛情は本来人間に向くべき感情であり、それがこの様な人工物に向くのは、自然に反しているというのだ。彼らは、パルミラの普及した先進国の多くで、少子化と晩婚化が進んでおり、それは、本来人間に向くべきだった愛情がこの人工物に向けられた結果、誰も結婚して、子供を作ろうとしなくなったためであると主張している。

しかし、人々は知っている。それら、パルミラに嫌悪感を抱く人々の多くは、実際には、パルミラに触ってみたことさえない人たちなのだ。だれでも、新しいものは怖いものだ、あの、今では持っている当然になった携帯電話ですら、出て来た当初は、厳しい使用マニュアルでがんじがらめにされて、使用場所を限局されていたそうだ。でも、今ではむしろ、使えない場所の方が限られている。

「一人で、壁に向かってぶつぶつ話しているのは不気味だ」なんてことを言っていた人は当時、一部のコメンテーターの中にさえいたそうだが、その人達はもし生きていけば今も、同じような主張を自信を持って繰り返せるだろうか。パルミラにまつわる批判も、携帯電話の時のように、やがて落ち着いてくるのだろう。現に、そう言った批判は年ごとに減ってきているように僕は感じている。

販売開始から15年が経ち、普及率はもう7割を超えている。パルミラが、僕らの社会に、本当に受け入れられるのに、もう、そう長い時間はかからないだろう。

干渉

十2

パルミラ販売の代理店でアルバイトしていた友人が、僕のところに購入を持ちかけてきてから、思い出せば今日で丸2年になる。

その間、僕のパルミラは学生用アパートの6畳半の狭い一室に立ちつくして、僕が手をつなぐまで、そこでほほ笑みながらじっと立っていてくれる。パルミラは、自律的には座らないのだ。それどころか、横になることもない。遠隔的に充電が出来るレストマットと呼ばれるマットの上に一晩も立っていれば、パルミラは一日の活動に十分なエネルギーを蓄えてしまうことが出来る。

パルミラを自立的に座らせたり、横になってから元の立ち上がった姿勢に戻させたりするのは、開発当初は技術的に難しかったらしい。そのような機能を付けると、少女のような体の大きさには、収まりきらなかったそうだ。もちろん、今では、そんな機能を取り入れたパルミラも原理的には製造可能で、実際に一時期、販売もされていたのだが、それもなぜか普及しなかった。外見上は今のパルミラと全く変わらないのだが、どうも、新たに付け加えられた動作の細かな仕草があまりに人間に似すぎていて、それでいて、微妙に異なっていて、付帯者に逆に強く違和感を覚えさせてしまっらしかった。

人間の感覚は、とても不思議なものだ。あまりに人間に似すぎると、それを人間の子供として強く認識しすぎてしまうのか、あるいは、本来は人間ではないという理性のさざめきとその意識がぶつかって、不快に思うものなのか。いずれにしろ、自分の部屋に、見知らぬ子供がいたとしたら、それは不気味なものだ。ただ、パルミラは、手を引けば歩いて付いてきてくれる以外、特に際立った動作をしない。微笑みは、いつも変わることがない。話しかけられたことに反応し、

声のした方向を向いて、ひたすら笑うだけの機能しか、彼女にはないのだ。それでも、人はその機能しか持たない製品を、強く、おそらくは長いこと求めていた。

僕のパルミラは、他の人のパルミラよりも、髪が少し長い。もちろんそれは、製造上の微細な誤差にすぎないのだが、色々な人のパルミラをまじまじと見ているうちに、そうした些細な違いにすら、気がつくようになってしまったのだ。他のパルミラでは、前髪が眉のラインより、少し上の方までしかきていないのだが、僕のパルミラは、眉にかすかにかかってくるくらいまで、前髪が下りてきていた。それに気づいて、僕にパルミラを売ってくれた代理店で長らくバイトしていた友人にそのことを話すと、彼はおかしそうに、苦笑いを浮かべて

「お客さんは、よくそういうよ。……僕自身も、そう思っけれどね」とだけ答えた。

彼のパルミラを、僕は大学で何度となく見かけていた。彼は自分のパルミラをとともかわいがっていて、彼が自分のパルミラを見つめるときの瞳は、親が子供に向ける瞳よりももっと情熱的で、それでいて、穏やかなものだった。愛する人をエスコートするようにやさしく、彼は自分のパルミラの手を引いて、いつもキャンパスの北側の少しさびしい入り口から、大学にやって来るのだった。

彼のパルミラは、僕の見たとこ、僕のより眼が少し大きくて、まつげが長い気がした。

彼は、時々、自分のパルミラの前に屈みこんでは、彼女の繊細で、長いまつげについた小さな白い綿くずなどを、人差し指と親指でそっと優しく取り除いてやっていた。パルミラは、何をされているのか、理解していない。でも、それだからこそ愛おしい瞳で、その時、彼の方を見て、にこりとほほ笑むのだった。

その光景は、傍から見ても、とても優しい光景で、気がつけば、その時キャンパスを歩いていたら何人かの人が一瞬足をとめて、見入ってしまうほど、引き寄せられる光景だった。彼や、彼女たちも、僕の友人と同様にパルミラを連れていて、それはそれなりに、自分のパルミラを愛しているのだろうけれど、彼の、パルミラに愛情を注ぐしぐさを見て、何か感作されるものがあつたらしかった。気のせいかもしれないが、彼のしぐさに足を止めた人たちが皆、そのあと自分のパルミラを見つめて、その細い髪の毛を、そつと優しく、なでてやっていたように、僕には見えた。

優しさは、伝播すると、昔、何かの映画でやっていたのを僕は思い出す。

誰かの優しい行為を見た人は、思わず自分も、自分の大切な存在に対して、やさしいふるまいをせずにはいられなくなると、その映画では言っていた。

だとすれば、パルミラに注がれた彼の愛情は、そのあと、幾多の人々の愛情を呼び覚まし、そして、多くのパルミラが、その主人の優しさにきれいな微笑みで返したのだろうと、僕はその日、家に帰ってから想像した。

昔、パルミラがなかった時代に、人々は何に向かつて、これだけの愛情を注いでいたのだろう。おそらく、彼のように、あふれんばかりの愛情を、誰かに対して公然と注ぎかけるといふ行動は、世間的にはばかられていたのではないか。

僕も中学生くらいの頃、人間の女の子を愛してみたことがあつたけれど、それは今ではとても苦しい思い出だ。

ペーパー・ブロッサム

二人で、公園の小さな散歩道を歩いていた時のことだ。

先日降った雨のせいで、道の真ん中に、大きな水たまりができていた。

僕は、そういうとき、男の子が先に渡って、女の子の手を引くものだと思っていた。それは、誰かに教わった知識というよりも、いろんな映画や、本なんかで、みんな当然のようにそうしているから、僕もこういうときは、そうしなくてはいけないのだと思っていたのだ。

だから、僕は当然のように、そのぬかるみを飛び越え、彼女に向かって大きく手をのばして、彼女の手が僕の手に触れるのを待った。

でも、彼女の反応は、予想とは違ったのだ。

彼女は僕の手を見るなり、一歩後ずさりして、そして思わず、自分の前や後ろを振り返ったのだ。そして、少し怒ったような声で、

「やめてよ！」

とさえ、言ったのだった。

僕は驚いて、差し出したその手を、引っ込めてさえしまった。

彼女は白い頬を真っ赤にして、そして、僕の方は一度も見ないまま、水たまりの一番端まで歩いて行き、草のぼうぼう生えているその道の端のところを歩いてまで、僕の手を借りようとはしなかった。

彼女の真新しい白いサンダルは、草の中を歩いたせいで、露に濡れ泥で汚れてしまっていた。彼女は水たまりを越えてから後も、僕の

方ははつきりと見ようとせせず、一言も発することなく、雨に洗われた緑の美しい散歩道を、細い肩を怒らして歩いていた。

僕には、隣を歩く彼女が頬をふくらませながら、それでも、ちらちらと僕の表情を眼だけでうかがっているのがわかった。でも、僕はどうして、彼女をそんなにも怒らせてしまったのか、一向に判っていなかった。僕は男の人がみんなやるような行動を取っただけだった。

そして、それは少なくとも、彼女のためを思っただけの行動だった。しかし、結果として、僕は彼女を怒らしてしまった。

おそらく、僕は何か間違いを犯したのだろう。男の子として、何かしてはいけないことを、してしまったのだろう。

人間と人間の関係には、詩や、芸術ですら表されていない、その他、見た目でも分からない、文章化されていない取り決めが、あまりに多すぎる。そして、その基準は人によって少しずつ異なっている。

僕の嫌われてしまったその行為が、別の人にとっては、ちょっとした憧れであったりすることもある。

それを、僕らはいちいち学んでいかなければならないのだろうか。人によって、基準の違う取り決めを、一つ一つ、間違いを恐れながら、砂の山を、中心に立てた枝を残して、少しずつ、周りから崩していくように。

結局、ふり返ってみれば、中学から高校にかけて僕は人間の女性を数人愛した。しかし、結果はどれも似たようなものだった。彼女たちの「基準」を僕は僕なりに努力して、学びとろうとしたが、仕舞には、それにもいい加減、疲れてしまっていた。

僕は、その時々で、強い男にもなったし、やさしい男にもなったのだ。

何でもできる器用な人間にもなったし、ちよつとがさつな男性になったこともあった。繊細で、詩や文学を理解する男性であることもあれば、そんなものは全く気にも留めない、アウトドア派の人間になつてみたりもした。

しかし、そうした努力をすればするほど、僕にはだんだん、わからなくなつてくるのだつた。こうして、努力して育んだ彼女と僕との愛情は、果して、真実の愛情と言えるのだろうか。

彼女はきつと、本当の僕ではなく、努力して得た僕の姿を愛しているにすぎないのではないかと思ひ始めたのだ。そのような、虚像に向けられた愛情を僕は、僕に対する愛情であると受け取つても、よかつたのだろうか。

それに関しては、いまだにわからない。

彼女たちの思い描く、『彼氏』の枠を踏み外した規格外の僕を、彼女たちは果たして好きになつてくれたのだろうか。それを犯すのは、勇気といえるのか、それとも、彼女たちへの理解が足りないために生じる行為と、受け取られてしまうだけなのだろうか。

ただ、それを試みる前に、僕はこの終わらない積み木崩しに疲れてしまつていた。

いや、疲れてしまつていたのは、実は、僕だけではなかつたのかも、しれない。

世の中の人はみんな、もはや疲れていたので。人の顔色をうかがい、お互いの不文の法を読みあい、それを満たすことに喜びを感じ、そ

れにそむくことに恐れを抱くのに。

誰かを愛するということは、誰かの法律の網の中に、自分を組み入れる作業だ。いずれ、その法律は、二人の折衷のものへと変わっていくのかもしれないが、その期間の何と長くて、なんと耐えがたいものなのだろう。

この、一分一秒が競われる時代の中で、花が咲くのを待つような時間の長さを悠長に待ち続けることが出来る人が、果たしてどれほどいるのだろうか。

インスタントの代用品が、枯れない造花が、これほど咲き誇っている時代に、季節を待ちこがれることの意味を、僕らは何処に見出せばいいのだろうか。

時代はもう、強い絆を作るという作業に、背を向けてしまったのだ。技術の進歩が、僕らに、絆という、がんじがらめのクモの巣のような代物に背を向ける勇気を与えてくれた。

それは、少し大げさな言葉で言えば、解放、なのだ。皆を縛り付けていた煩わしいザイルが、ついに断ち切られたのだから。

僕らに、個人を大切にすることが与えられたのだから。

なぜなら、僕らにはもうパルミラがいる。

枯れない花が僕らにはある。

カツコウの卵

彼女は、僕らがどんな人間でも、笑ってくれる。手を引けば、どこへでも付いてきてくれる。疑うことを知らず、肯定することだけを知っている。そこには、人それぞれに違う決まり事など、もはや存在しない。規格化された、極めて安定な、動作のパターンが僕らをいつも勇気づけるように仕向けてくれる。予想外の相手の反応に、僕らはもう、惑わされることはない。

だが、逆に、僕らから突然、このパルミラが失われてしまったら、どうなるのだろうか。

想像したくもない、その恐ろしさを、僕に教えてくれたのも、また、代理店で働いていた友人の彼だった。

ある日、彼がいつものように、大学の北側の入り口から、彼のパルミラの手を引いて現れた。

彼のパルミラは、今日もくりくりと大きな瞳を僕らに向けて、微笑んでいた。

その表情が、今日はなんだか一段と愛らしく感じたので、僕は彼に、「君のパルミラの瞳は、いつ見てもくりくりしていて、かわいいね」と言っただけだ。

彼は、僕にそう言われると、まるで親が子をほめられた時のように大喜びして、控えめな自慢話でも始めるのではないかと僕は思った。

「……やっぱり、そうかな」

彼は、笑ってくれた。だが、彼の反応は思いのほか小さかった。

喜んでいるというより、失笑しているという表現が似合うような表情で、彼は力なく笑っていた。

「うん、いや、ほんと。個体差はほとんどないっていうけどさ、やっぱり信じられないよね。自分のパルミラの顔って、少し離れたところからでも、なんとなくわかるしさ」

僕がそういつても、彼は相変わらず皮肉に口をゆがめて、笑っているだけだった。

彼の様子がおかしいことに、僕はその時に至って、ようやく気がつき始めていた。

「……でも、実際に計ると、差はないんだよ」

彼は僕に目を合わそうとしないまま、うつむき加減に、そう言って笑った。

「子供の顔が親父に似ているとか、おふくろに似ているとかいうのと、同じ議論なんだろうな。数値化できないけれど、確かにそう見えるような、あいまいな共通認識だ」

僕には彼が、何故かさみしそうに見えた。

パルミラは彼の方を見て笑っている。でも、彼は彼女と手をつないではいるものの、その瞳を一度たりとも、覗き込もうとはしない。

「……どうか、したのかい？」

僕は気になって彼に尋ねてみた。

彼は僕の言葉など聞こえなかったかのように黙って、うつむいたまままだった。

頬がかすかに、上下に振れているようだった。表情はうかがえなかった。だが、彼はその時、どうやら笑っていたようだった、

「……実は、俺の小さい頃から一緒にいたパルミラが、先日壊れちゃってね」

彼の口から、へっと、何かを嘲るような声が漏れた。

「……店に持って行ったら、もう、修復不能だって言われたんだ。それで、保障に入ってたから、新しいものと変えてもらったんだけど……」

彼はそこでようやく、手をつないだ自分のパルミラを見た。

彼のパルミラは、急に向けられた彼の視線に反応して、彼の方を見つめ、愛くるしい、大きな円い瞳で、にこりと笑った。

「……違うんだよね」

冷たい響きを伴った声が彼の口から洩れた。

「違うんだよね。俺の、ずっと一緒だったパルミラとは、どこか。眼が、ちよつと大き過ぎるような気がして、実際計ったりもしたんだけど、数字的には変わらなかった。店に頼んで、俺の記憶に合うような感じに、少し顔を整形してもらったんだけど……」

彼は、自分のパルミラを見詰めたままだった。彼のパルミラも彼を見つめていた。彼のパルミラは、子が親を見つめるような眼差しで、かすかに首をかしげ愛くるしく微笑み続けていた。だが、それを受け止める彼の表情は、もはや、ただ愛着のない、見知らぬ物を見る眼差しでしかなかった。

「……今度は、目があんまり小さくなったような気がして。なかなか、俺の中のイメージとは、一致しなかったんだ。拳句の果てに、店長があきれて、『シリアルナンバーが違うから、違う顔しているような気がするだけじゃないか』なんて言い出してさ。おれも、実際計って数字が同じだったわけだから、それ以上、反論できなかつたんだ。実際、パルミラの部品の製造は、すごく厳密らしいからなでも……」

彼はそこで、自分のパルミラの顔をもう一度見つめた。美しい笑みが、彼をやさしく見つめ返している。

「やっぱり、違うんだよね、確かに。先入観と言われたら、それまでなんだけど」

喪失

僕は彼のパルミラがいつの間にか変えられていたことにすら気がつかなかつたくらいだから、彼の感じていた違和感を理解していたとは言えないかも知れない。

彼のパルミラは昔から目が大きく、まつげが長かった気がしていたし、その特徴は、この新しいパルミラでも共通しているように感じている。

だが、思えばそれもまた、僕の先入観に過ぎなかったのかも知れなかった。

彼の持つパルミラは目が大きいと、僕が偏った目で彼のパルミラをずっと見続けていたに過ぎなかったのかも知れなかった。

彼の両親は新しいものが好きで、その結果として彼は幼い頃から、パルミラが当然のように存在する家庭で育っていた。そのため、パルミラの個体間の違いを敏感に感じ取れる素養を、彼は人より強く持っているのかもしれない。

だが、鋭敏過ぎる感覚を持つことは、果して幸運なことなのだろうか。

僕は彼を見ながら、そう思っていた。

彼の話聞いて、僕の表情が無意識に曇ったのを察したのだろうか。彼は急に、開き直ったように顔を上げ、

「……そんな数字にもならない違いをいちいち気にしているだけで、この笑顔に、素直に喜べなくなるのは、どうしてなんだろうな」と、かすかに語尾に震えを伴った声で自嘲し、僕の方を向いて明る

く笑った。

彼とはその日、授業が重ならなかったので、そこで別れた。

人気の少ない、学校の西の外れの法学棟へ向かう彼の痩せた背中、彼の腰ほどもないパルミラの体に寄り添うように屈められることもなく、ただ二本の、長さの違う二つの平行の影となって、太陽の高く上った真夏のキャンパスを、陽炎の内に融けるように消えていった。

十_三

パルミラ喪失症候群、という一連の神経症の存在が日本の心理学の学会に提唱されたのは、一昨年のことだ。

何らかの理由で、パルミラを失った人々が、急に精神不安定になり、不眠や頭痛、挙動不審などの変化が現れることがあるという。

新聞によれば、最悪の場合、うつ病を併発し自殺する可能性もあると、発表した関西の大学の研究グループは指摘していたそうだ。

自分のパルミラを失った場合だけではなく、失って新しいパルミラを得た人の中にも、元のパルミラとの違いを強く感じて、新しいパルミラに元のような愛情を注げなくなるなどの症状が現れることがあるのだという。

そうした場合、もうパルミラを持つのをやめてしまえばいいと言う人もいるが、それは一度パルミラをもった人間からすると全く考慮

できない選択肢だ。

子供を事故などで不意に失った親が、また子供を作ろうとする話によくある。

その場合、生まれてきた子供が元の子供の代わりになりうるわけではない。代わりを強要されたところで、その子供はいずれ自分の人生を否定されたような感情を抱くだろう。なにより、そんなことは親の身勝手に過ぎないと僕は思う。

だが、おそらく大抵の親は、そんなことは間違いなく理解しているのだろう。分かってはいるが、失ったものは埋め合わせなくてはいけないのだ。子供ができれば、それまでの夫婦の関係は、母親と父親の関係に変わってしまう。子供が不意にいなくなつたとしても、その関係が元の子供のいない夫婦の关系到、簡単に遡れるものなのだろうか。

一度パルミラと手をつないだ人間が、再びパルミラから手を離すことは、同じ理由でなかなか難しい。家族を捨てるのにも等しい、苦しい選択を、選びとれる人など、どこにいるのだろう。

少なくとも、僕には想像することすら、難しい。

パルミラを失い、新しいパルミラに違和感を覚えているからと言って、その小さな丸い手から、自分の手を、簡単に切り離すことはそう言った理由で簡単にはできない。しかし、今まで通り、それを見つめていても、それまで感じていたような満足感を得ることはできず、不安を伴った神経症の症状があらわれてしまつらしい。症状がひどい場合は、精神安定剤などの投薬が必要になる場合もあると僕は聞いていた。

パルミラを失った友人もその後、お医者さんから、ごく弱い精神安定剤と睡眠薬をお守り代わりに処方してもらつて、最近では、症状はだいぶ良くなったようだ。週一回のカウンセリングの効果もあつてか、彼の新しいパルミラにも、今まで通りの愛着がわき始めたよつで、むしろ今まで気にしていた、目が大き過ぎるといふ特徴を、彼女のチャームポイントとして、自慢することさえみられるようになった。

だが、彼のように、すべての人が、その病気から簡単に立ち直るといふわけではない。

特に中高生の場合、パルミラを失った、あるいは、それを与えられないがゆえのさびしさに対する反動として、非行に走つてしまつというケースが、時折ニュースの特集などで報じられている。

パルミラが、少年の非行の防止に、著しい効果があるという調査結果は、多くの大学の調査で肯定されていた。もちろん中には、与えられたパルミラに“いたずら”をして壊してしまうケースもあつたが、そういった行為も、パルミラに対して芽生え始めた感情に対する、正しい反応ができないだけではないかという考察が、学者の間

ではなされていた。

パルミラと少年を密室で、たった二人で置いた場合、それを破壊するケースはごくわずかだった。

一部の少年院では、この調査結果を受けて、パルミラを少年の房に各自一体ずつ持たせ、その管理をさせるという任務を与えているという。正直、パルミラに管理らしい管理はいらないのだが、それでも外を連れ回せば、服は汚れるし、体も汚れる。それをいつもきれいに整えて、置くという任務が、試験的に、一部の少年に対して行われている。

パルミラをきちんと管理できず、しばしばむごたらしく破壊してしまふ習癖を持つ少年いるという。

そうした少年の多くは、他人とのコミュニケーション能力に著しい欠陥があるが、あるいは共感する力に欠けている場合が多かった。親の愛情にかけている場合が多いという調査結果もあった。

つまりは、そもそも、人間と関係を上手に結べない人間は、自分のパルミラとの関係も、うまく築けないということだ。だが、人間との関係を築くより、パルミラに愛情を注ぐことの方が、まだずっとやさしい。パルミラは、そういう現場では、人間と人間という気むずかしい関係に至る前の前段階のステップとして、トレーニングに用いられているらしい。

十 4

パルミラがいかに、今の僕らの社会に必要とされていて、そしてこれからも、その役割は大きくなっていくかと言うことが、解ってい

ただけただろつか。

僕はパルミラを愛しているし、まだパルミラを知らない他の人々にも、パルミラの良さを一度知ってもらいたいと思っている。ただし、僕はもう、パルミラを持つことは出来ないのだ……。

例え僕がいかにパルミラを持ちたいと言ったところで、それは周りの人間がもはや許してくれないだろうし、例え持ったとしても、また僕は自己嫌悪に陥るような行為を繰り返してしまうことだろう。だから……。僕はもうパルミラを自身から遠ざけるようにしている。僕は、彼女を愛するのに、値しない人間なのだ。その愛らしさを遠くから眺めて、目を細めている以上の幸福を、僕は味わうことを許されてはいないのである。その手に触れることも、丸い、暖かい健康的な頬に触れることも……。僕はそうした権利の一切をもはや失ってしまった人間なのだ。

人間？僕は人間なのだろうか？愛すべきものを、愛する権利も持たないイキモノが、果たして、人間を名乗ってもいいのだろうか？

まあ、いい。それは僕以外には、あまり関係のないことだ。ともかくも、僕がそうなってしまうに至った理由を、もうそろそろ、お話ししてもいい頃かと思う。

別れの始まり

僕は去年、パルミラを連れてヨーロッパの小さな町を旅行した。パルミラの機内持ち込みはもうすでに許可されていると言ったが、航空機の座席がそのために広くなったというわけではない。エコノミークラスに座ると、ただでさえ狭い座席にもう一人、子供が乗ったような形になるわけだから、正直、窮屈で仕方がない。だが、だからと言ってパルミラと離れて乗ることは考えられなかった。この旅行は、彼女と一緒に来ることに意味があったのだから。

長い飛行機での移動の間、彼女は、ずっと僕の座席の前に座っていた。

自律的に座れないので、僕が手を取って、彼女をそっと座らせてあげた。彼女は僕に座らされている間、僕の方をまっすぐに見て、そして、いつもの美しい笑顔を僕に向けて微笑んでいた。

隣を見れば、隣の席の人も自分のパルミラを機内に連れて来ていた。彼女は、まだゆとりのある旅行らしく、パルミラのために席を一つ余計に取っていた。

僕は、自分のパルミラに、なんだか悪いことをしているような気持ちになり、申し訳なくなってしまう彼女の顔を覗き込んだ。彼女は僕の視線を感じて、座席の下に座り込んだまま、僕の方を見詰め、いつものように微笑んでいた。

……ごめんね。

僕が小さな声でささやくと、彼女は微笑んだまま、かすかに首をか
しげた。

飛行機から降りると、空港は旅行者でいっぱいだった。そして、彼
らや彼女らに手を引かれた、それと同じくらい、たくさんのパルミ
ラがそこにはいた。

あまりにすごい人ごみだったので、少し太った巻き毛の知らないお
ばさんが、手荷物ロビー中に響かんばかりの大きな声で、パルミラ
の名を呼んでいた。

おそらく、彼女のパルミラは、ここで迷子になってしまったのだろ
う。

パルミラは手を離すと、いつまでもそこにとどまり続けるので、彼
女のパルミラは、ひよっとすると、他の誰かに間違われて、すでに
何処かへ連れて行かれてしまっていたのかもしれない。

人間の子供でもそうだが、こういう人込みでは、そういうことがよ
くある。

誰かのパルミラと自分のものを間違えて、ずっと後になって、ひ
よっとシリアルナンバーを覗き込んだ時に、偶然気が付いたという
話が、僕の知り合いの中でもたびたびあった。

だから、パルミラに所持者の認証機能を付けるべきという話も、も
ちろん出ていた。だが、そういうものが販売されたことは、結局の
ところ、無かった。パルミラは、誰でも受け入れてくれる事に意味
があるのだ。その安心感が、パルミラを、僕らにとってかけがえの
ないものになっている。

万が一、何かの不具合で自分のパルミラがうまく自分を認識してくれなくなったら、それはどれだけ悲しいことだろう。そういうことを防ぐために、パルミラには、そうした複雑な個人認証の機能は全く搭載されていないのだと言う話が、付帯者の間にはまことしやかにささやかれている。

もちろん、実際の所は誰も知らない。だが、たとえこの話が、単なる噂や想像の域を超えなかったにしても、これだけ容易に付帯者の間に広まった事から考えて、例え全てではなくとも、パルミラを持つ人々みんなの意見を代弁している部分があるのだろう。

幸い、パルミラは代理店に連絡して暗証番号さえ入力すれば、すぐに現在位置を割り出せるように、位置を知らせる装置が内蔵されている。だが、それで位置がわかったとしても、誰かに間違っただけでいかれていた場合、その交換にはどうしても数日がかかってしまうし、その間、その人はパルミラ無しでやり過ごす事になってしまう。

いつもそばにいた存在がいなくなった数日間というのは、どれだけ悲しいものだろう。

巻き毛のおばさんはまだ、彼女のパルミラの名を、大きな、悲しげな声で叫び続けている。僕はそれを見ながら、己のパルミラの、小さく丸い儂い手を、引き寄せるように強く握った。

空港を出ると、僕らは列車に乗って目的地のヨーロッパの古都へと向かった。

どこか古いにおいのする列車の開け広げられた大きな窓からは、石

畳の街に特有の爽やかで、どこまでも乾いた風が吹きこんできて、
街路に曝された僕らの頬をやさしく撫でて行った。

彼女の細い髪が、その風になびいて、はたはたと揺れた。

彼女と僕は小さなす席に座って、広い窓から見える、見慣れぬ淡
いブルー・グレイの海を二人、目を丸くして眺めた。

海辺

僕は向かいの席に座ったパルミラの瞳を、そつと覗きこんでみた。海からの照り返しがまぶしいためか、パルミラは僕の視線には気付かず、ずつと海を見たままだ。深い黒真珠のような漆黒の瞳に、僕らの見詰めた海がさかさまに映しだされていた。

そのかすかに開いた、幼い口元からは、今しも、何か感嘆の声がこぼれてきそう、あるいは、こぼれて来ているかのようで、僕はもう一度、彼女が見つめる海を見ながら、こそばゆくこみあげてくる、幸せというものにおそらくとてもよく似た感覚に、ほおを緩めていた。

海辺の小さなペンションに着くと、まだ昼下がりと云ったほどの時間ではあったが、すでに先客が来ていた。見れば、今日の飛行機で、僕のそばに席を取っていた、彼女だった。

「こんにちは！」

麦藁帽子の下で、彼女の青い瞳が驚いたように見開かれていた。

「あなた方も、こちらにいらしたの？」

「ええ！」

僕も、思わず、声が高くなった。

「あなたと、同じ国に旅行して、まさか同じ宿になるなんて！世界つて、広いようで、意外と狭いんですね」

彼女はそれを聞くと、楽しそうに目を細めてふふ、と笑った。

「そうね……。あ、この子があなたのパルミラちゃん？何か、名前は付けてる？」

「いえ……。やっぱり、パルミラには、パルミラって名前が、一番似合っている気がして、そのままです。」

「そうよね」

彼女は、そういうと僕のパルミラの前に屈みこんで、その瞳をじっ

と見つめていた。僕のパルミラは、彼女の視線を受けて、首をかして、にこりと笑った。

「愛嬌のいい子ね！」

彼女も思わず笑った。

「他の人のより、ちよつと反応がいい気がするわ。きつと、あなたがちゃんとお世話メンテナンスしてるのね」

「お世話メンテナンスなんて、本当に最低限のことしか」

僕はほめられて恥ずかしくなって、頭をかいた。

「あなたみたいに、ちゃんとパルミラ用の席を用意したり、しませんでしたし」

「私も、普通の旅行なら、パルミラには悪いけど椅子の前に座ってもらつわ」

彼女も恥ずかしそうに歯を見せて笑った。白いきれいな歯が並んでいた。

「……でも、今回の旅行は私にとって特別な……。私の、オリジンをめぐるたび、だから」

「オリジン？」

僕は聞きなれない言葉に、戸惑い、聞き返した。

彼女は細い眉の下の青い瞳を僕に向けて、無言でまっすぐに頷いた。……私のおばあちゃん、そして、お母さんは、この国で生まれたの。で、日本のお父さんとの間に私が生まれて、お母さんは、この国を出た。……おばあちゃんだけ、残してね。で、そのおばあちゃんも、去年亡くなって……。そしたらね、その数日後に、大きな包が届いたの」

彼女はその時の驚きを表すかのように、手を身体の前に大きく広げて、丸く目を見開いた。

「開けてみたら、何ができたと思う……？」

彼女は、そういつと、彼女のうしろに隠れるように立っていたパルミラを、僕の前に引き出した。

「この子よー！」

僕はその時、彼女のパルミラを、初めて間近に見た。それは僕のと変わらない、ごく普通のパルミラだった。でも、どことなくその面影は、隣で微笑む青い瞳の彼女のそれに近いものがあった。

「……君に似ているね、何となく」

僕は感じたままを素直に言った。

「でしょ？」

彼女は目を糸のように細く引いて微笑んだ。笑うと、右側だけえくぼが出来た。

「……おばあちゃん、ずっと、機械の女の子なんて、気持ち悪くて嫌だっと思ってたの。だから、きつと一人で暮らしてたんだと思ってた……。でも、私も、お母さん達も知らないところで、実はこの子と出会って、一緒に暮らしていたみたいなんだ。だから、私、これ見たとき思ったの。きつとおばあちゃん、私にずっと会いたかったんだろって……。」

彼女はそういうと、長い下まつげに彩られた目の端を、日に焼けた細い褐色の指先でそっとぬぐった。

「……お母さんが出ていく時、好きにしたらいいって言って、結局ここを離れたこと、一度もなかったのよね。それでも、気持ちには、私をいつも気にしていてくれた。そばにいたかった……。だから、その代わりとして、きつとこの子を愛していたんだろって思った。……人間って、完全に孤独では生きていけないじゃない？愛されなくてもいいけれど、愛する対象だけは、いつも必要だと思うから。……この子達のような」

彼女は、自分によく似たパルミラの瞳を、じつとのぞきこんだ。彼女のパルミラも、彼女の方を見て、にこやかにほほ笑んだ。

「この子は私より、おばあちゃんをずっと知ってる。本当は私に伝えなかったはずおばあちゃんの優しさだって、一杯見てきている。そして、なにより、おばあちゃんの、誰にも言えなかった寂しさも知ってる……。だから、私、この夏休みの間に、この子とこの街を旅行しようって決めたの。……だって、ここは、“彼女”の街だも

の。彼女がない旅行なんて考えられないわ」
そういうと、少女は、また目を細めて笑った。
少女のパルミラは、そんな彼女の表情を、下から見上げるように、
じっと見つめていた。

その時、唐突に僕のパルミラが、僕の手をぐい、と引っ張った気が
した。

僕は驚いて、自分のパルミラを見つめた。

僕のパルミラは、僕の視線を感じて、いつものように微笑んでいた。
別段、僕の手を引っ張ったような形跡もなかった。

「……どうしたの？」

青い目の少女が、僕の顔を不思議そうに覗き込んでいた。

彼女のパルミラも、僕の顔を覗き込んでいる。

「……いや、なんか」

僕は、四つの目に見つめられて、なんだか少し照れくさくなって、
下を向いた。

「僕のパルミラが、さっき、僕の手を引っ張ったような気がしたか
ら」

「パルミラが？」

彼女はそう言うのと、かがみ込んで、僕のパルミラの目の高さに自分
の顔を持って行った。彼女は大きく目を開けて、僕のパルミラの漆
黒の瞳の中を覗き込んでいる。僕のパルミラは、その視線を受けて、
彼女の方を振り向き、そして、いつもの愛らしい笑顔で、彼女の強
い視線に答えた。

……ふふっ。

おかしそうに彼女が笑った。

「パルミラが手を引っ張るなんて、聞いたこと無いけど……。でも、

ホントだったらおかしいわね。この子、もしかしたら、焼き餅焼いちゃったのかな」

彼女は立ち上がり、口元に軽く手を当てて微笑みながら僕のパルミラを見下ろしていた。

「……あるいは、しびれを切らしたのかも」

「ママ達が買い物の帰りに、立ち話するような物かな？」

彼女はそう言うと、破顔一笑、声を上げて笑った。

「……おかしい！面白い子ね、あなたのパルミラ」

手を繋ぐより、強く

「……おかしい！面白い子ね、あなたのパルミラ」
彼女はそう言っつて、僕のパルミラの頭を、無造作に撫でた。

パルミラは微笑んだまま、されるがままになっていた。僕は、自分が撫でられているような不思議な恥ずかしさを感じた。

「……もう、中に入りましょ？あなた、まだチエックインも済ましていないみたいだし……。このディナー、この辺で捕れた魚介類が一杯使われて、結構豪華らしいよ。……じゃあ、また、あとで！」
彼女はそう言っつと、半袖から伸びた細く長い腕を曲げて、僕に挨拶した。僕も同じ仕草で彼女に返した。彼女のパルミラが彼女の後に続いて、笑いながら建物の中に入っていく。その微笑みは、画一的に規格化された笑顔以外の、何物でもないはずなのに、何処かしら彼女の、片方だけはつきりした愛らしいえくぼのある笑顔の面影が感じられ、見なれたはずのパルミラ笑顔に、僕は少し、照れてしまった。

翌日、彼女が街を案内するというので、僕たちも一緒させてもらった。
街を案内する、と言っつても、彼女自身、この街に来たのは初めてなのだ。ただ、彼女のお母さんなどから聞いて、僕よりも良く、この街について知っているだけに過ぎない。

「……この街を巡っつて、空気を吸っつているだけでいいの」
彼女は言っつた。

街全体が見渡せる高台だった。其処は古い城跡のようで、もうしろそのものは残っていないかったが、かつて城の周りを囲っていた城壁がその高台を縁取るようにぐるりと張り巡らされていた。城壁の切れ目には一台だけ、何処の観光地にもあるようなコイン投入式の望遠鏡が据えられていた。そのクリーム色のメッキは先端部だけはげ落ち、昼前の陽光を浴びて、地の鉛色が鈍く光っていた。

彼女の瞳は、その城壁に囲まれた高い空をじつと見つめていた。はぐれ雲が、僕らの頭上を一つ、二つと流れていく。彼女はその青い空を飲み込もうとでもするように、細い喉を伸ばして、真上の空を見つめていた。

「この街にいますだけで……」

上を向いた彼女の喉から、微かな声が漏れた。

「それだけで、私はおばあちゃんと繋がっていられる気がするから……」

僕は、彼女の言葉に、すごく詩的なものを感じた。

もう存在しない人と、繋がっていられるという感覚が、本当にあるのか、僕には解らなかった。あるいは、そう言った感覚は、本来人間が持つているはずの感覚なのかも知れなかった。でも、僕らはいつしか、そう言った実体のない、しかし感覚だけは伴ったあやふやな絆を、確かな存在感を持って感じることが出来なくなっているのかも知れない。ただ、そうした目に見えない、皮膚で感じられない絆を信じ続けることは、僕には難しそうなことだと感じた。

それはとても不安なことだ。そして、見えないと言うことは、何度となく疑わしく思ってしまうものだ。

「……いま、変なこと言うなって、思ったでしょ」
気がつくと、彼女はもう空を見るのを止め、僕の方を向いて笑っていた。

「いや……」

「いいの。私も、そう思うから。……どうしてなのかなあ。ここに来て、始めてそんな身近におばあちゃんを感じられた気がする。もう死んじゃった人なのに。何年かに一度送られてくる、手紙の中だけの人だったおばあちゃんが、確かにここで産まれて、息をして、毎日……、ご飯を食べて、お出かけして、そして、波の音を聞きながら静かな夕食を取って……。そうして、冷たいシャツに入って、やれやれ、なんて溜息付いて、眠りについたんだろうなって、そんなどうでもいい、ありきたりな日常を感じるの。……それを……、このパルミラは、ずっと見ていたんだろね。私達が、本来共有すべきだったそうした時間を、変わりに受け止めてくれていた」

彼女はそう言うと、祖母のパルミラの頭をそつと撫でた。

細い髪の毛が、さらさらと微かな音を立てたのが聞こえたような気がした。

「……絆って、なんなんだろう」

パルミラの細い髪の毛を、うつとりと愛おしげな瞳で見つめながら、彼女はぽつりと言った。

「それは、それほど大事な物だとは、今まで思ってこなかった。どちらかと言えば、私をがんじがらめにする……、自由を奪う鎖のように考えていた。でも……」

彼女はそこで、言葉を切った。続く言葉をゆっくりと選んでいるようだった。

「どうしてなんだろう。私がこの街に来てしまったのも、また、絆の力なんだよね……。縁、とでも言うのか……。私は、何処かで、人と繋がっていることを、まだ求めていたのかな……。」「
彼女はパルミラの頭をやさしく撫でながら、独り、含み笑いをした。そして、ふと顔を上げ、僕の方を見つめた。

「あなたと出会ったのも、また、縁なのかもね。……。おばあちゃんとの繋がりが、私とあなたを偶然引き合わせた。……。あ、その前に、この子と私も」
彼女はそう言うと、自分のパルミラの頭を、ぽんぽん、と軽く叩いた。パルミラは、微笑みながら僕の方を見つめている。

「死んだ人は、ある意味、まだ死んでいないのかも。そう考えると不思議だね。その人はいなくなっても、その人の影響は、まだ残るんだ。……。絆は、もしかすると、その人そのものとの繋がりで、無いのかもね。だとすれば……。私が、おばあちゃんをここで感じられるのも、解る気がするな」
彼女はもう一度、青い空を見上げた。先ほどまで頭上にあつた雲は、もう、視野の彼方にまで行ってしまっていた。

「私は、私の中のおばあちゃんと繋がっていたんだ。手紙の中のおばあちゃんの頃から、ずっと。そして、この街に来て、その繋がりが、もっと、確実な物になった気がして……。存在を信じられる物になった気がしている。わたしのこの目も、この肌の色も、おばあちゃんから受け継いだものなのだろうけど……。私の中のおばあちゃん、いまいはつきりした輪郭を持っていなかったから……」

彼女はそう言って、口をつぐんだ。

我を忘れたように、何も無い空をじっと見つめていた。

僕はそんな彼女に、思わず見とれてしまっていた。
彼女の褐色の肌が、青い背景の中に、まるで一枚の絵のように融け込んで見えた。気がつけば、僕は彼女のかたちの良い唇だけを見つめていた。

「……………ねえ？」

彼女が僕の方を見た。

齒車

「……………ねえ？」

彼女が僕の方を見た。

僕は視線を彼女の瞳に戻した。

「……………あなたのパルミラ、なんか様子が変わらない？」

彼女はてくてくと僕の所まで歩いてくると、僕の足下にかがみ込んだ。

「……………やっぱり変。私を見ても笑ってくれない……………。夕べ、ちゃんと休ませてあげた？」

僕の足下の影の中で、彼女は青い瞳で僕を見上げて言った。

「あ……………、一応、レストマットの上には載せて置いたけれど……………」
僕はしどろもどろに答えた。

「どうしちゃったのかしら……………」

彼女は、心配そう僕のパルミラを見つめていた。僕のパルミラ目の前で、何度か手を振ってみたりもしたが、パルミラはその手の動きを追う素振りすら見せなかった。

試しに、僕がその手を引いて歩いてみようとする、パルミラはちゃんと僕の後に付いて歩く仕草をした。しかし、僕がいくらまじまじと見つめていても、彼女は僕の顔など眼中にないかのように、焦点の定まらない目で、虚空を見つめているだけだった。

「……………長旅のせいかしら」

彼女は腕を腰に当てて、すっくと立ち上がった。

「……………何処か壊れてしまったのかも……………今日はとにかく、この子を置きに、一度部屋に帰りましょう」

彼女は残念そうにそう言った。

いったん部屋に戻り、パルミラを部屋の隅に立たせたまま、僕はそれまで握っていた彼女の手を離した。すっと、彼女の身体から生気が抜けたように感じた。彼女は、僕が手を離す瞬間、また手を引かれると感じたのか、片足を一步前に踏み出しかけていた。そのまま、彼女は動きを停止したので、何か不格好な、それだけに余計悲しげな姿勢で、彼女は動きを止めたのだった。僕はそれを見ていて、パルミラはやはり、ロボットなのだと思った。

「……置いてきた？」

ペンションのロビーに戻ると、彼女がにこにこしながら待っていた。彼女の傍らにもパルミラの姿はなかった。

「もう、おばあちゃんを追いかける旅は終わったから
彼女は恥ずかしそうにそう言った。

「……ここからは、私のための旅行。パルミラちゃんには悪いけど、休んでいてもらうことにしたの」

「うん、その方がいいかもね」
僕がそう言つと

「……そうよね」

彼女は、意地悪く、歯を見せて笑った。

それから残りの3日間は、彼女と共に楽しく過ごした。

本来だったら、僕のパルミラと一緒に巡るはずだった世界遺産の遺跡や、美しい滝、教会などを、僕は、旅先で出会った青い目の少女と共に巡った。思い出深いそれらの場所で撮られた記念写真には、本来予定されていた僕のパルミラの姿は無く、その代わりに、晴れやかに微笑んだ褐色の彼女の姿が写ることになった。

「……きれいに撮れてる？」

中世に建てられた荘厳な教会のステンドグラスの前で彼女の姿を写

した後、彼女は僕の傍に駆け寄ってきて、デジタルカメラの小さな画面を僕と一緒に覗き込んだ。

「お、上出来」

冗談めかしてそう言って彼女は僕の鼻先で笑った。

彼女は何かを思い出したように、腰に付けたポーチから自分のカメラを取り出すと、自分が過去に撮った写真を見直し始めた。そして、

「……面白いよね……」と小さな声で呟いた。

「あなたの写真には私が一杯写っているし、私の写真には、あなたがたくさん写ってる。写真を撮った時の私の表情はどこにも残らない。でも、あなたには本来解らないはずの、私がどんな風に、あなたを見ていたか、その眼差しはこれに焼き付いている」

彼女は小さな画面を見つめながら、恥ずかしそうに微笑んだ。

「……後で、写真送るね。アドレス教えて？私だけ持ってても、しよつがない写真、ばっかりだし」

僕らはそこで、お互いのアドレスを交換した。

ちゃんと記録されたことを確認した後、彼女は、何か大きな用事で済んだかのようにほっと息をついて、

「今日が最終日なんて、信じられない。もっと旅行が続けばいいのに……」そう言って眉尻を下げて笑った。

僕もその時には、彼女と同じ気持ちだった。

もっと旅行が続けばいいのに。彼女との時間が、もっと過ごせたらいいのに。そんな気持ちで一杯だった。

ヒト・ガタ

僕と彼女は、時間を惜しむように、その後、近くの小さなレストラ
ンで夕食を取り、それから少し歩いて、大分遅い時間まで、街角の
カフェでコーヒーを飲んでいた。そしてその後、ペンションに戻っ
てからも、僕らはしばらくロビーで話し込んでいた。翌日の彼女の
飛行機は、朝大分早い時間だったが、彼女は出来る限り起きていて
くれた。そして夜半も過ぎ、いい加減、明日の行動に差し支えら
ない時間になつて彼女はようやく、ロビーのソファから立ち上
がり、明日はたぶん会う暇がないだろうからと、お休みとさよならを
一緒に言つて下がった。

僕は彼女が部屋に戻つてからも、頭の後ろに手を組んで、しばらく
ソファに座っていた。向かいのソファには、先ほどまで彼女の
座っていたかたちに窪んでいて、僕はまだ、彼女と向かい合つてい
るような、不思議な高揚感を感じていた。僕は何度となく触れた、
彼女の指先の感覚を思い出していた。そして、鼻先で微笑む彼女の
大きな笑顔を思い出した。

思わず浮かんでくる笑みを堪えながら、ふと時計を見れば、いい加
減、僕も寝なくてはいけない時間になつていた。僕は、後ろ髪引か
れる思いを感じながら、そつとソファから腰を上げ、自分の部屋
に戻った。

僕の部屋の扉を開けると、既にカーテンが引かれていて、部屋の中
は真っ暗だった。廊下の明かりが一本の筋のように部屋の中に入り
込んだ。僕は、その光りの先に視線を感じて、思わず眉をひそめた。
それは、僕のパールミラだった。

僕のパールミラは、旅行の初日、調子を悪くして部屋の隅に置かれた

ままの状態で、それから三日間放置されていた。あの時と同じ、虚空を見据えたまま、その瞳は、廊下から差し込む光をつつろに反射していた。

僕は暗闇に浮かぶこのロボットが、始めて気持ちの悪い物であると感じた。

こんな物を毎日連れ歩いてきた自分が信じられなくなりそうだった。この自分の心境の変化には、僕自身、戸惑っている部分もあったが、僕はその時、この心理こそが普通なのだと、固く信じていた。おそらくは街のストレスの多い孤独な生活の中にと、人間の心は矮小化し、こうしたロボットの助けを借りなくては自分の心の平静を保てなくなるのだろうと僕は思った。

僕は部屋の明かりを付け、この気味の悪い模造物の身体を180度回して、壁の方に向けた。

中途半端な姿勢で固まっていたパルミラは、その時足を交互に動かして、従順に壁の方を向いた。人間の子供なら、絶対に壁を見たまま静止することはないだろう。その不格好で、悲しく、薄気味悪い後ろ姿を見ながら、僕は眠れる気がしなかった。僕はベッドの枕の位置を逆にし、パルミラの方に足が向くようにした。そして、それでも消えない人間の気配に背を向け、部屋を暗くして、壁を見つめて眠った。

写真

十5

翌日朝早く彼女は発っていった。僕は何とか彼女を見送ることが出来、二言三言の挨拶をして、慌ただしく彼女と別れた。

見送りをすませると、僕も荷造りを始めた。

少ない荷物とおみやげを、スーツケースにあらかた詰め込んでしまつと、僕の目は部屋の隅に残された、パルミラに、ようやく向けられた。

パルミラはまだ、昨夜、僕が向きを変えた時のままに、何も無い壁を見つめて、ひっそりと静止していた。

僕は無意識にこのロボットから目をそらしていたことに、その時気づいた。いつの間にか、もう以前ほどの愛着を感じられなくなつてしまつていた。それでもここに置いていくのも迷惑だろうと思つた。手荷物にして飛行機に乗せようとしても、荷物としてあらかじめ送ることすら、周りの人に阻まれて、うまくいかないだろう。僕はやつかいな物を持つてきてしまつたと、内心後悔していた。それでも、長い間一緒に暮らしていた擬似的なパートナーではあるのだから、責任を持つて、連れて帰る必要はあると思つた。

僕は何となく、パルミラに微笑みかけ、壁に向けて伸ばされたままの手を掴んで、彼女を振り向かせた。愛らしい彼女の顔を覗き込んでも、彼女はうつろな瞳のまま、にこりとも微笑んではくれなかつた。

笑わないパルミラをつれ、僕は再び長い間飛行機に乗つて、自分の国に戻つた。

飛行機の中で、僕はずっと眠っていたが、夢に見たのは遠い異国で

出会った彼女との甘くおぼろげな思い出くらいだった。

充実した5日間の旅行に疲れて、ぐっすりと眠っている間に、世界は旅立つ前の見なれた様相を取り戻していた。

住み慣れた部屋に戻り、荷物を元あった場所に片付けてしまうと、僕はすぐ自分のパソコンに向かった。自分のメールボックスに、着信はまだ無かった。さすがに帰国したその日にメールが来ることはないとは思ったが、僕は自分の分の写真はその日の内に整理してしまい、早々に彼女に送っておいた。

しかし、それから数日が経っても、彼女からの返信はなかった。

ようやく返事が返ってきたのは、旅行から帰ってきて2週間ほどが過ぎた頃だった。

『おくれてしまってごめんなさい』

とは文面に書かれていたものの、メールはわずか数行の簡素な物だった。それでも、そのシンプルな文面の中に、彼女らしい快活さを感じて、僕は思わず微笑んでしまった。

メールには、確かにたくさん写真が添えられていた。

彼女は、おそらく、カメラに入っていたたくさん写真をざっと整理しただけで送ってきたらしい。中には少し手ぶれして、お世辞にも上手に撮れているとは言えない写真も数枚混じっていた。それでも、その写真は僕と彼女の懐かしい旅行の記憶を呼び覚ますのに十分すぎる物だった。僕と彼女が旅行先で取った幾つもの写真。教会、遺跡、美しい自然……。

しかし、その写真も後半になって、僕はその中に、数枚、取った覚

えのない、見なれないものが混じっていることに気づき、思わず首を傾げた。

それは、日本での写真のようだった。

おそらくは、何処かの島なのだろうか。美しい海が背景に広がった、高原の中で彼女と一緒に微笑む、パルミラの写真。しかし、そのパルミラは彼女が旅行に連れてきていた物とは違う物のようだった。彼女のパルミラより、それは明らかに新しい個体だった。彼女の連れてきていた物は、彼女の祖母の物だったから、時間が経ったパルミラ特有の少し落ち着いた皮膚の色をしていた。この写真に写っているのは、おそらくまだ、製造されて1年と経っていないものようだった。どうやら、この写真自体が先日の旅行より少し前に取られた物のようで、写真のデータをよく調べると、“撮影日5/6”と記録されていた。

しかし、なにより僕を驚かせたのは、その写真に写った彼女の表情だった。

それは、とても自然な笑顔だった。僕の持っているカメラに写った彼女の写真には、その笑顔はなかった。僕の写真に写ったどの笑顔よりもずっとその笑顔は自然で、そして、耐え難いほど美しかった。傍らで微笑むパルミラの笑顔は、やはり愛らしかったが、彼女の微笑みは、そのパルミラの微笑みの比ではなかった。

僕は長いこと、人工的な微笑みばかりに心を許してきたせいか、人の微笑みの真贋すら、もう見分けが付かなくなっていたようだった。彼女のその微笑みは、微笑むことを目的としていなかった。それは、内側から零れてしまっただけのものだった。僕は、彼女のその表情を撮影していただけでなく、“知らない”ことに気づいた。そして、そのカメラを向けた誰かが、明らかに彼女の一瞬の表情を出来る限り美しく捕らえようとする一種の愛着を持って、そのレンズを彼

女に向けていることに僕は気づいた。

あり得べき結末

それは、もしかすると、家族旅行の写真なのかも知れなかった。フアインダーを向けたのは、彼女の父で、あのパルミラは、家族の物なのかも知れなかった。

だが、僕にはそう考えることが出来なかった。何より、大分うち解けたと思っていた彼女の心が、予想以上に遠くにあつたことに、僕はうちひしがれていた。

僕は、失意を感じながら、自分のパソコンの前から離れた。

振り向けば僕のパルミラが、片手を宙に差し出したまま、じつとこちらを見ていた。

パルミラは笑っていた。不調が改善したらしく、また以前のように愛らしく微笑んで、差し出したその小さな丸い手を僕が再び取るのを、ただじつと待っていた。

僕は、自分のパルミラに近づき、その手を取った。その手は子供の手のそのように、微かに暖かった。そして、パルミラは僕の視線に反応し、僕の方を見て、にこりと微笑もうとした……。

しかし、動きはそこで止まった。

パルミラの首の関節が、その時、突如、耳障りな異音を立て始め、歯車の空回りするキイキイと甲高い音が首筋から聞こえてきた。パルミラの頭は、歯車の振動で、小刻みにがくがくと揺れた。そして、微笑んだ目だけが、廻らない首より先に僕の瞳を捕らえた。口元が、

安心したように細く伸びた。

キュウウウと激しい音がした。つんと、ゴムの灼けるような嫌な匂いが鼻をついた。アンバランスに首だけが、がくりと力なく前に落ち、そのままがたがたと左右に大きく振れ始めた。首だけだった震えはやがて、身体全体に拡がり、身体の各部分が、独立した別個の生きもののようにびくびくと痙攣を始めると、僕は薄気味悪くなり、思わず彼女から手を離してしまった。

彼女は震えて立っていらなくなり、仰向けに床に転がった。手だけは高く宙に差し出されたまま、身体はまだ、中で何かもだえているかのようにビクビクと震えている。瞳が、再び僕の顔を描らえた。口元が細く引かれ、パルミラが笑った。首がさつきより激しくギイギイと振動をたてはじめた。笑いながら首がひつきりなしに震えている。やがて、歯車が異なる場所がかみ合ったのか、振り回される振り子のように、首がぐるぐると激しく回転運動を始した。首の皮膚が回転運動に巻き込まれ、すぐに伸びきって、切れかかったところで、歯車の擦れる音を激しく立てながら回転は止まった。身体が痙攣しながら、徐々に反り返った。そしてすっかり背中が反ってしまったところで、おなかの皮膚が裂けるぶちん、という音がして反り返った身体は、バランスを崩して横向きになった。パルミラの瞳は、まだ震え続けている首の先で、それでも大きく見開かれ、僕の顔を捕らえようとしていた。そして、口元はずっと、笑ったままだった。切れた首や、おなかの皮膚の間から、卵の白身のような透明で生暖かい、正体の分からない液体が漏れ始めた。それは震える首筋に反って流れ落ち、白い衣服を濡らし、床の上にひとしずくずつ滴った。パルミラが時折、大きく痙攣する度に、そのどろりとした液体は細かな雫となって、四方に飛び散った。同じ液体はやがて、パルミラの目や鼻、耳からも漏れ出した。彼女の顔は頑なに微笑んだまま、やがてその液体でどろどろに濡れてしまった。

僕は、これ以上パルミラを見ていられなくなった。
パルミラの電源スイッチについては不明だった。だから、このコン
トロールを失った作り物を、可逆的に停止させる術はもはや無かつ
た。

僕は先ほどまで座っていた、スチールフレームの椅子を手に取った。
パルミラは床の上に転がったまま、まだ震えていた。微笑んだその
顔は、依然と何ら変わらないはずだった。僕はそれに愛情すら感じ
ていたはずだった。しかし、どうしてだろう。僕にはもう、この笑
顔が、ただ気味の悪い物としか写らなくなっていた。

僕は椅子を高く振り上げた。そして、痙攣を続けながら、微笑んだ
ままの頭にめがけて、それを力一杯振り下ろした。

それから数時間の時間が経過したのに、僕は気がつかなかった。
時計を見て……、いや、その前に、明るかったはずの空がいつの間
にか暗くなりかけていたことに気がついて、僕は時間の経過を知っ
たのだ。

僕の衣服は、どろどろした透明な液体で湿っていた。
辺りには、飛び散った金属片や、プラスチック片が散乱していた。
飛散した破片が頬に当たって、僕は右頬に少し傷を負っていた。手
で触れると、指先にわずかに血が付いた。

僕は自分の傍らに転がった、幼児ほどの大きさの固まりを見た。そ
れは、頭部がひしゃげて潰れており、脳天から、幾つもの部品が飛
散しているのだった。大きな丸い瞳が、片方だけ半分飛び出してい
た。それは、最後の瞬間まで、僕の表情を捕らえ、微笑んでいた瞳

だった。今ではもう、何物も捕らえることはない、乾いた瞳。表面に付いた透明な液体が乾燥して、その飛び出した瞳は白く濁っていた。

僕は何か、大きな物を失った気がしていた。

しかし、それを失ったのが、果たして今なのか、僕には解らなかった。

僕らは実はもうずっと以前に、それを失っていたのかも知れなかった。だが、それを意識しないで、意識することを避けたまま、もう長いこと生きてきていたのかもしれない。

それが具体的になんという名前で呼ばれるべき物であるのか、その時の、僕の疲れた頭では、すぐに思い出せそうになかった。僕はフリリと部屋から外に出た。どろどろする液体が乾いて、身体に糊のように張り付き始めた。

孤独、それは、愛すべきものが見つからない時に感じる感情。

そんなことを言ったのは、あの青い目の彼女だったか。

彼女は知っていたのだろうか。

僕らが、気づかないうちに失っていた物を。

そんな事を考えながら、疲れた身体を引き摺り、マンションの表側の廊下をエレベーターに向けて歩いた。

指先は無意識にポケットを探り、吸ったこともないタバコを探していた。

ある時代の終わり

僕は今、不思議な懐かしさを感じながら、この手記を読み返していた。

思えば、この不幸な出来事からすでに3年の月日が流れている。この思い出は、長らく、僕の心の中に暗い影を落とし、思い返すことすら、ずっと忌避し続けていたのだが、今、こうして読み返してみると、それは確かに、ところどころ古い傷に触るようなつらさを伴ってはいるのだが、どこか懐かしく、僕は思わず自分の胸をかきむしりながらも、この文章を読み進めずにはいられなかった。

あの時の僕は、大切なものを失った喪失感を、何か別のもので埋め合わせようと必死だったのかもしれない。青い目の少女も、そしてあの不幸なパルミラも、僕の心の底に開いた穴を埋め合わせるために、僕が必要としていた存在だった。だが、思えばぼくは、あの時、本当に何かを失っていたのだろうか？あの、心の中の空白は、何かを失って空いたものではなく、成長とともに、心の中に開いた、一種の間隙だったのではないかと今では思っている。

僕は、その間隙を、まずパルミラで埋め合わせることを学んだ。

そして、それでも埋めることができない、何か本質的な部分を青い目の彼女という存在で埋めようとしていたのかもしれない。

それは、僕だけではなく、あの時代に生きる人の多くが抱えていた病だった。

パルミラが、あれほど急速に社会に浸透したのは、僕が感じていたような喪失感を、僕以外の多くの人々も一緒に感じていたためでは

ないかと思っっている。

みんなの生き方が、ばらばらになっていく時代の中で、僕らはつながっているすべを模索したまま、でもその答えがまだ見つからないうちに、時代だけがどんどん前に進んでいってしまっていた。

僕らは必死に、コミュニケーションをとるすべを開発しようとした。メールに、インターネットに、ケータイに……、ばらばらになっていく心と心との間隙をつなげる手法を、僕らは開発しようとしたが、どれも、僕らを、満足させることは、できなかった。

それは、何だったのだろうか。
何が足りなかったのだろうか。

僕はそれが「肯定」だったのではないかと思っっている。
自分一人しか、自分のすることの価値を見いだせなくなっていると思っっていた時代の中で、傍にいつも寄り添って、自分のこれからすることを、黙ってほほ笑みながら見つめていてくれる存在を求めたのではないだろうか？

あるいは……、黙って僕に手を差し出し、そして、全てを僕に委ねてくれる、そうした存在を……、触覚を伴った存在を、僕らは求めていたのだ。

理解し合うほどの時間があれば、それも解消できるのだろうか。
でも、あの時の僕らには、その時間すら、無かった。

つい先日、全く偶然だったのだが、大通りを歩いていて、懐かしい顔に出会った。

日の少し陰った日曜の昼下がりに、通りの向こうから歩いてきたのは、あのパルミラの販売代理店でずっとバイトしていた彼だった。

「やあ！」

僕が懐かしさと驚きで、思わず大きく手を挙げて彼に声をかけると、彼も驚きに目を丸くして、手をあげてこたえた。

彼の右手には、3、4歳くらいの少女がしっかりと手をつながれていた。

そして、その少女の、さらに右側には、彼より少し小柄な女性が寄り添って歩いていた。

「結婚したんだ」

彼は、僕の考えていることに気づいたのか、真っ先にそう答えた。

「妻と……、娘だ」

彼はそう言っつて、その少女の細い髪の毛にそつと手を触れた。

娘、と紹介された少女は、不安げな目で僕をじつと見つめたまま、恥ずかしそうに、父親の足の影に身を隠した。

「人見知りだね……。誰に似たんだか」

彼はそう言いながらも、目を細めて、自分の背中側に隠れた少女を見つめた。

彼の傍らでは、彼の妻と呼ばれた女性が、何か言いたげな瞳を彼に向けてじつと見つめていたが、その口元は、なんだかおかしそうに微笑んでいた。

「君は？……まだ、一人にいるのか」

「ああ……。まだ、一人でふらふらしてるよ」

僕は情けないけど、というニュアンスを込めて、自嘲するように笑った。

「はは……。まあ、今は生き方もいろいろだからな」

彼は、僕をやさしくそうフォローすると、

「でも、家庭を持つっていいものだけ」

と言って、再び自分の娘の方を見た。

彼の娘は、まだ父の足の影に隠れながら、片方の手の指を自分の口にくわえて、じっと僕の方を見つめていた。不安がだんだん薄れてきたのか、父の足と、彼女との距離が、先ほどより身体半分だけ離れていた。

「確かに、いろいろ厄介なことも多いし、気をすり減らすことも多いんだけど……。なんというか、毎日が充実しているんだ。……今を生きているって感覚が、もしかすると、独身の時より強く感じられているような気がする」

彼はそこまで言うと、自分の腰ほど届かない幼い娘に目を向けて、「一人で、勝手に死んじまう訳にも行かなくなったせいかもな」僕は、彼の言葉に、簡潔に、そうだな、と答えた。

今の彼は、地に足がしっかり付いているように、僕には見えた。確かに、独身の時の、どこか手探りで、着地するべき場所を探しているような落ち着きのなさは、今の彼にはなかった。

責任。僕はその言葉の意味を思い返していた。それは時に、人を縛りもするが、絶望の底に墮とされそうな時には、命綱ザイルにも変わる。

「……君の不幸な話は、僕もまだ覚えているよ……。あれは、大層ショックだったろうな」

彼は、至極残念そうな顔をして、僕にそう言った。

「いや、もういいんだ」

僕は彼に言った。

「どうしてなんだろう……。確かに、当時は相当ショックだったんだけど……。今では、むしろ良く分らないんだ。どうして、あの時、あんなに、あのことで傷ついていたのか……」

僕は少しためらったが、言葉を継いだ。

「……あの……、機械人形のことです」

彼が、大きくため息をついたのが聞こえた。

「じつは……、僕もそうなんだ」
彼は言った。僕は驚いて彼の顔を見た。

「僕の、あの二体目のパルミラ……、確かにあの後、ずっとかわいがってはいただけけど……。それから、どうしてか、あんまり連れて歩かなくなつてさ……。そのころかな、僕が、彼女と付き合い始めたのは……。今では、物置に、じつとして眠っているよ。……さすがに、捨てるわけにもいかなくてさ」
彼は困つたように笑つた。

彼の娘が、唐突に彼の顔を見上げた。

「……パルちゃん？」

幼い少女らしい、高い声で、少女は父親に問いかけた。

「そう、パルちゃん」

父親は僕に話しかけるときは違つ、やさしいまなざしと声で、まっすぐに見つめ続ける娘に、答えた。

「……パルちゃんね、みーちゃんの友達なんだよ。時々、お話しするの……。パルちゃん、チョコが大好きなの……。でも、お口の周りを汚すから、お母さんに怒られるの」
傍らに立つ母親が、困つたように、娘の肩に手をかけた。
しかし娘は、そんなことにさえ気がつかない様子で、じつと父親の足元から、彼女をやさしげに見下ろす二つの瞳を見つめていた。

僕はその光景を見ながら、確かに僕の求めていたものは、こういうものなのかもしれないと考えていた。

あの時代そのものが、この光景を求めていたのかもかもしれない。

彼の話では、彼はもう、パルミラの販売代理店では働いていないという事だった。

パルミラの生産台数は、ここ数年で急速に落ち込み、経営は思わしくないそうだ。言われてみれば確かに、もうこうして街頭を歩いて

みても、パルミラを連れて歩く人は見かけなくなっていた。まるで一時の、……とはいっても二十年近く続いたのだが……、熱病であったかのように、パルミラは忽然と、僕らの前から姿を消してしまっただ。

「……時代が求めていたんだと思うよ」

彼は僕の方を向き直って言った。

「……しかし、もう時代が、求めなくなっただ」

彼は、これから映画を見に行くんだと言って、僕と別れた。

どんな映画か試しに聞いてみると、

「……子供向けのアニメ映画だよ」

と、恥ずかしそうに言って笑った。

彼の妻は、すれ違ってからも僕の方を向いて、微笑みながら、丁寧に辞儀をしていた。僕も思わず、彼女が頭を何度も下げる回数に同調して、頭を上下させていた。

僕は彼らと別れてから、一人、見知ったものがいなくなった大通りを歩きながら、彼らの必要としなくなったパルミラを想っていた。暗い押し入れの隅で眠り、ほこりをかぶることを受け止め続けているパルミラ。

必要とされれば表に出され、微笑みを振りまき、所有者を元気づけていた彼女も、必要とされなくなれば、静かにそれを受け入れ、過ぎゆくときを見つめているだけだ。

だが、やさしさとは本来、そういったものなのではないだろうか。僕にはなぜかそんな気がしていた。

僕らはパルミラに学ばされたのだ。

あれは、時代の裂け目に現れ、僕らに何かを伝えるために存在した悲しい人形だったのではないだろうか。

彼女の伝えようとしたものは、確かに僕らの心に、伝わっていたのだろうか。

僕はそんなことを考えた。

もしかすると、彼女を搾取しただけで、終わってしまったのではないだろうか。

大通りのポプラ並木の向こうには突き抜けるほど高い、青い秋空が広がっている。

空の片隅から、羊雲の一群がどやどやと行進してくるのが見える。

ふと、僕は通りに沿って並んだビルの高い窓の一つから、二つの真っ黒で大きな瞳が僕の方を見下ろしているのを認めた。その瞳は、僕と目が合うと、たちまち細くなびいて、愛らしい、美しい笑顔となって僕の方を見つめた。

僕はその瞳に手を振ってこたえた。

微笑んだ二つの瞳の傍らから小さな丸い手が、僕に手をつなぐのを促すかのようにそっと伸ばされたを僕は見た。

だが、ちょうどその時、暗い窓の向こうから、また別な二本の手が伸びてきて、その少女の腰をつかんだ。二本の白い手は、慣れた手つきで、少女をそっと抱きかかえると、暗い部屋の奥に連れ去ってしまった。

僕は自分の顔がいつの間にか緩んでいるのを感じた。

久しぶりに、パルミラを見た気がしていた。何のわだかまりも感じ

ずに、あの笑顔に答えられたのは、あれ以来始めてだったような気がしていた。

僕は再び、前方に広がる幅の広い通りに目をやった。

見知ったものは誰もいなかった。しかしそれは、同時にすがすがしくもあった。

その時、ふと気になって再びあの高い窓に目をやると、暗い部屋の中からこちらをじっと見つめている強い視線があるのに気づいた。

驚いて、その視線に手を振った。

窓はすでに開け放たれていた。

それは一人の女性だった。真っ白い、細い首をのばして、僕の方を見つめている。

大きく見開かれた、二つの青い瞳が、たちまち細くなびいて、気がつけば僕は、彼女の名前を、大声で叫んでいた。

「終」

ある時代の終わり（後書き）

この話はこれで完結します。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。

次回作も、楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4511h/>

パルミラ

2010年10月10日08時10分発行